

個別学術領域としての“環境思想”は存在しうるか  
——「プラグマティズム的転回」を批判的に包含する学術モデルの検討——  
Can *Environmental Thoughts* exist as an original discipline? :  
Consideration about academic model embracing *pragmatic turn* with criticism

上柿 崇英  
UEGAKI, Tkahide

## はじめに

アルネ・ネス (Arne, Naess) の訃報を知ったのは、今年に入ってまもなくである。ディープ・エコロジーという概念を提唱し、現代環境思想の確立に際して欠くことのできない偉大な業績を残した彼は、2009年1月に、96歳で没した。

以前から多くの研究者たちは、現代環境思想のこれまでの議論が行き詰まりを見せる中、その方法論や学問的存在意義について頭を悩ませてきた。そこでは多くの議論が成されてきたにもかかわらず、それが実際の環境危機に対して言説としての有効性に乏しく、不毛な論争だったのではないかと思われたからである。

わが国では特に2000年代に入って以降であったが、このような背景から、環境倫理学の分野ではある特徴的な方向性が見られるようになった。それは、かつての人間中心主義と、非人間中心主義にまたがる諸問題から距離を置き、現場主義や政策論との接続を目指す一連のムーブメントである。つまり「プラグマティズム的転回 (pragmatic turn)」——われわれは本論でそう呼ぼうと思う——によって、いまや環境倫理学は、抽象的な議論を捨て、われわれの学問的存在意義を、“現場”に求めるようになったのである。

このような動きには、いくつかの面で共感できる。例えば環境に関わるすべての学問的存在意義は、確かに究極的には環境危機という解決すべき問題が存在しているということに由来する。したがって、われわれの学問は現実のリアリティから断絶してはならないし、われわれ自身も、現場の知識や経験、そしてそれに根付いた知見に敬意を払わなければならない。確かにこれまでの研究は、このような側面をあまり重視してこなかったものであり、この点において彼らの方向性は間違っていない。

しかし、ここには議論せねばならない論点がある。それは端的には、われわれが現代環境思想の困難を意識するあまり、環境思想という学問的営為全体を、このような「プラグマティズム的転回」の中にゆだねてしまっているのか、ということである。つまり、環境

倫理学よりも大きな視野に立って、“個別学術領域としての環境思想”を想定するとき、現場主義だけで、この学問の果たすべき役割を担いきれるのか。現に「転回」後の多くの研究は、確かに多くの潜在力を秘めた成果を提示しつつあるものの、そこにはすでに存在している環境社会学などの周辺領域との境界がますます曖昧になっている。もしこれが真に環境思想・環境倫理学の目指すべき道であるならば、この学問の固有の存在意義は、どこにもないということにならないか。

それでもなお、環境思想・環境倫理学といった学問には固有の存在意義がある、と述べるのが本論の課題である。現代環境思想の衰退からわれわれが真に行うべきことは、過去の議論の否定でもなければ、単に現場に直進することでもない。むしろこの「プラグマティズム的転回」という動向をも踏まえた、環境思想という学問全体の総括を行うこと、これである。そして冒頭にふれたネスの死は、まさにわれわれにこの取り組みへの喚起を促しているように思えるのである。

## 1 われわれが向き合ってきた「環境思想」とは何だったのか

### (1) 現代環境思想の位相

さて、本論では主要な論点を検討する前に、そもそもわれわれが環境思想と呼んできたものについて、その概念と諸言説の整理をするところから始めよう。

まず確認すべき点として、われわれが通常“環境思想”というとき、それは60年代から80年代にアメリカを中心としながら立ち現れた一連の言説群を指しているということである。ここには、自然の内在的価値論、自然の権利論、動物解放論、ディープ・エコロジー、エコ・フェミニズム、ソーシャル・エコロジー、エコ・ソーシャリズム／ソーシャリスト・エコロジーなど様々な言説が存在してきたが、これらは相互に対立しながらも、全体としてはひとつのパラダイムを作り上げてきたのであった。そして本論では特にこのパラダイムを指して「現代環境思想 (contemporary environmental thoughts)」と呼んでいる。

また、これらの言説のラディカルさに焦点をあて、改良主義やエコロジー的近代化論などと区別するとき、伝統的なやり方に従って、これらを<狭義の意味での環境主義 (environmentalism)>に対する<エコロジズム (ecologism)>と呼ぶことにする<sup>1</sup>。

さらに、現代環境思想に含まれる対立軸から諸言説を整理すると、そこには大きく三つのドメインが存在することが分かる。ひとつは何らかの形で、動植物、景観を含む自然物に対する権利を問題にしようとしたグループであり、既存の権利概念を自然物に拡張するというアプローチが代表的なものである。もうひとつは、生態系などよりマクロな全体性を強調することによって、生命圏平等主義や新しい存在論を提示しようとしたグループである。本論では前者を「権利派エコロジー (ecological rights)」、後者を「ディープ・エコロジー (deep ecology)」と呼ぶことにしたい。この二つのグループに存在していた中心的な溝は、先の新しい存在論に立ち、全体性を強調するのかどうかであり、大雑把に言って、全体論と個体主義の対立であった。しかし両者は、何らかの形で既存の世界観・価値観をラディカルに変革すべきだと考える点では共同戦線を張っていたともいえる。

これに対して現代環境思想には、世界観・価値観というよりは、むしろ社会構造のラディカルな変革を求めた第三のグループが存在した。これらは現代環境思想の中心をなした第一、第二のグループに比べれば傍流に立つものであったが、ソーシャリズムを含む既存の社会理論に大幅な環境的修正を試みたものがあり、現代環境思想を構成するひとつのドメインをなしていた。この観点からいえば、もうひとつの対立軸はアプローチの違いに基づくものであり、主に世界像・価値観を軸として倫理的な問題を重視した第一、第二のグループと、社会変革を志向する第三のグループとの間に存在する。そこで本論では、第一、第二のグループを合わせて「倫理的エコロジズム (ethical ecologism)」、第三のグループを指して「社会的エコロジズム (social ecologism)」と呼ぶことにしたい。

このように整理をすると、現代環境思想の位相は、下記のような入れ子状のマッピングとして俯瞰することができるようになる。まず技術や政策論的アプローチを志向する改良主義などの<狭義の環境主義>から区別される、ラディカルな諸言説としての<エコロジズム>があり、その<エコロジズム>は、そのラディカリズムの志向性によって大きく「倫理的エコロジズム」、「社会的エコロジズム」に分けられる。さらに「倫理的エコロジズム」は、個体主義か全体論かによ

って「権利派エコロジー」と「ディープ・エコロジー」とに大別できる、といったようにである。もちろん実際には、これらの枠組みに収まりきらない多彩な論点や論者が存在したわけだが、現代環境思想のパラダイムを大局的に俯瞰する上では、以上の整理がもっとも有益であると思われる<sup>2</sup>。

## (2) A・ネスと「ディープ・エコロジー」

現代環境思想には、上記のように様々な対抗軸が存在し、それらは決して一枚岩ではなかったが、パラダイムそのものの“中心的なテーゼ”は明確であった。それはわれわれが環境危機に直面している根本的な原因を、自然物を“道具”とみなし、それを支配の対象とみなす近代的な世界観、すなわち人間中心主義的な世界像に求め、そのような世界観の変革なくしては、いかなる対策も表面的な対処に終わってしまうこと、そして危機の根本的な解決には、それを取って代わる新しい世界像、すなわち非人間中心主義的な世界像を何らかの形で提示する必要がある、というものであった。この課題に対して「権利派エコロジー」は、権利の対象をラディカルに拡張することによってそれを行おうとし、「ディープ・エコロジー」は、それを“新しい存在論”から突き詰めようとしたわけである。中心的な争点を把握するためには、実際にはこの両者を俯瞰する必要があるが、ひとまず本論では「ディープ・エコロジー」を取り上げることで、現代環境思想の持っていたラディカルさの真髓について確認したい。というのも「ディープ・エコロジー」こそが、現代環境思想をここまで育て上げた最も重要な言説だったからである。実際環境思想で行われた多くの論争は、「権利派エコロジー」と「ディープ・エコロジー」の間、あるいは「ディープ・エコロジー」に触発されるか、その批判をめぐって行われてきたのであり、その意味において「ディープ・エコロジー」は、現代環境思想のまさに“震源地”だったからである。

それでは「ディープ・エコロジー」の存在論とは、いかなるものであったのか、それを見ていこう。周知のように「ディープ・エコロジー」という概念の名付け親はA・ネスであり、その基礎は彼によって築かれた<sup>3</sup>。ネスの提起した存在論を理解するためには、まず彼の提起する「ゲシュタルト (gestalt)」、「関係的・全体的場 (relational, total-field)」、「自己実現 (Self-realization)」という三つの概念を確認する必要がある。ネスによれば、そもそもわれわれが慣れてしまっている、自己と他者の区別、主観と客観の区別というものは極めて“恣意的なもの”であった。例えば伝統的な哲学では、物体の質量などのような科学的

に同定できる客観的性質（第一性質）と、色や味、温かさといったように、われわれが知覚する性質（第二性質）を伝統的に区別してきたが、ネスによると、現実に人間が体験している性質は、第二性質か、あるいは常に「ゲシュタルト」として知覚される第三次性質によって存在しているというのである。

ここでいう「ゲシュタルト」とは、複雑な要素の相互作用が織りなす全体性のレベルで、初めて意味をなす物事である。例えば音楽は「断片」となる音素の相互作用が織りなす全体性として存在している。そしてわれわれがそれに“美しい”、“悲しい”といった体験をするのは、われわれが全体としてそれを知覚し、われわれがその相互作用に位置づいているからである。さらに、われわれが引き起こされる感覚の多くは、そこに同席した他者の存在やその日の天候によっても異なる作用を引き起こすかもしれない。すなわち、われわれの体験は、あらゆる相互作用の網の目の脈絡の中で、さらに自己をその相互作用の一部分に含むような形で存在しているのである。

そこで彼がいう「関係的・全体的場」と表現するものが明らかとなるだろう。これはまさに彼の存在論を端的に示すものであるが、物事の本質は、常に相互作用を織りなす物事の関係性の中に、そして相互作用全体を媒介して存在する、という主張である。

「エコソフィでは『物AはBである』は放棄され、『物AはCに関してBである』あるいは『関係的なものACは性質Bを持つ』という言明の方を選ぶ」<sup>4</sup>。

そして、このように考えていけば、すべての人間存在は「関係的」な存在であり、さらに人間と動植物、土壌、景観もまた、「関係的」なものとして理解されることになる。

「ゲシュタルトは、『私』と『私でないもの』をともに結びつけて一つの全体にする。喜びは私の喜びになるのではなく、喜ばしいものになり、私と私でない何かはこの喜ばしいものの、互いに依存しあった、離れられない断片なのである」<sup>5</sup>。

さらにネスは、このような存在論に立ちながら、われわれが徐々にこのゲシュタルトの認識を高次に拡張させ、最終的に、自己をエコシステムや生命圏というもっとも「高次のゲシュタルト」の「関係的」な一部分として認識できることを示そうとした。これが、彼の言う「自己実現」に他ならない<sup>6</sup>。

「自分自身の自己がもはや個人的な自我や有機体により十分に境界が定められないほどの深い一体化を通じて発達する。人は自らが生命全体の真正な一部であると経験する。おのおのの生物が目的そのものとして、

原則的には自分自身の自我と対等の立場にあるものとして理解されるのである」<sup>7</sup>。

さて、ネスが以上の存在論から提起したかったことは、おそらく次のようになると思われる。第一に、環境危機を引き起こしている根源には、近代の原子論的、個体論的、機械論的な世界像があり、まずわれわれはその世界像そのものを転換して行かなければならないこと。そして第二に、多くの人々が「自己実現」によって、多くの存在論的な“境界”を乗り越えていくことで、人はおのずと環境に配慮した行動を取らざるを得なくなり、それが究極的には環境危機を乗り越える不可欠な基盤となる、ということであった。

### （3）“震源地”としての「ディープ・エコロジー」

ネスを代表とするこのような全体論は、様々な論争を引き起こした。もっとも多く寄せられた批判は、全体論に立つことによって、時として生態系の“健全性”が人命に優先するといった反ヒューマニズム的側面を持つということであった。つまり“エコファシズム”という批判である。

ただしこの主張は、半分は正しいが半分は間違っている。それはネス自身が必ずしも先の存在論を「権利派エコロジー」のように、普遍的な倫理原則の提唱を目的として論じていなかったことにある。彼はここで展開されたものを「エコソフィ (ecosophy) T」と呼び、「自己実現」とは、それぞれがそれぞれのやり方によって到達すべきものであり、「エコソフィT」は彼自身の実践例に過ぎない、と初めから明言している<sup>8</sup>。しかし他方で彼は「原則として」と断っておきながらも「生命圏平等主義 (biospherical egalitarianism)」といった表現を用いたり、「倫理から存在論へ進み、そして倫理に戻るのが環境主義の哲学では大切である」のように、全体論から倫理原則を引き出しているように取られてもおかしくない表現を多用していた<sup>9</sup>。

もっとも、全体論という観点についてみれば、例えば「土地倫理 (land ethic)」を提唱したA・レオポルド (A. Leopold) もその一人としてしばしば言及される。彼は生態系全体の健全性に言及し、倫理的責任が発生する倫理的共同体の範囲を、生態系を含む“土地”にまで拡張しようとしたが、やはり彼自身も普遍的な倫理原則それ自身にはこだわっておらず、ここには“われわれの配慮の範疇を拡大させよう”といった素朴な主張があるだけである<sup>10</sup>。

「ディープ・エコロジー」が先のような論争を引き起こしたのは、このような意味では、環境主義を普遍的な倫理原則によって論じようとしたむしろ環境倫理学全体の風潮にあった。全体論を普遍的倫理原則とし

て論じたのは、とりわけJ・キャリコット (J, Callicott) であったが、ネス自身の主張はこれらの論争に、むしろ巻き込まれていった側面があったのである<sup>11</sup>。

#### (4) 「倫理的コロジズム」の衰退

とはいえ、「ディープ・エコロジー」にはやはり重大な問題があった。それは、彼らの環境思想には、環境危機を論じる射程が「精神主義 (mentalism)」、つまり最終的に人々の“心のありよう”の問題となってしまう、環境危機をもたらしている社会構造論的な視点が欠落していたことである。そして他方で普遍的な倫理原則をめぐって行われていた環境倫理学の論争は次第に不毛なものとなり、人々はそれに疲れ、議論は煮詰まっていった。ここへきて、環境倫理学全体が、そしてそこから環境思想全体が衰退して行くのである。

しかし「ディープ・エコロジー」は、われわれに対して、計り知れない功績を残したことも事実であり、この点については、確認しておく必要がある。それは第一に、このラディカルイズムが、やはり大局的には人々の環境意識の向上に大きく貢献していたこと、また第二に、生命地域主義といった草の根の環境運動を生み出したことである。しかしより重要なのは、彼らのインスピレーションが倫理学者以外の研究者をも触発したということである。“われわれが社会として認識してきたシステムには、エコシステムというより高次の全体性が存在する”、というパラダイム転換のメッセージは、例えばエコロジー経済学を生み出したし、「社会的エコロジズム」の多くの議論は、この「ディープ・エコロジー」に触発されることで生まれてきたのである。さらに、確かに彼らは「精神主義」に陥ってはいたものの、彼らが問題にした環境危機と近代的世界像の関係にまたがる幅広い議論は、われわれがこれから環境思想を作り上げていく際に、なくてはならない偉大な功績となって残ったのであった。

## 2 環境倫理学における「プラグマティズム的転回」

### (1) ウェストンからカツツ、ライトへ

「ディープ・エコロジー」という“震源地”を中心として行われた論争の中から、80年代になって新しい動きが出始める。その火ぶたを切ったのは、A・ウェストン (A, Weston) であった。ウェストンは、85年のEnvironmental Ethics誌の論文において、価値の文脈依存性を強調することで、独立した内面的価値の基礎づけをめぐる論争に、その基礎づけそのものを否定する「反基礎づけ主義 (anti-fundationalism)」を導入した。これが発端となって、その後E・カツツ (E, Katz) などとの応答が行われる中、次第に賛同者が増えてい

ったようである。そしてこのムーブメントをひとつにまとめ上げたのが、A・ライト (A, Light) であり、96年、彼は賛同する論者を集めて、その名も『環境プラグマティズム (environmental pragmatism)』という論文集をカツツと連名で出版した<sup>12</sup>。そして、この出版が重要な契機となって、環境倫理学における「プラグマティズム的転回」が進んでいくのである。

この“プラグマティズム宣言”とも呼べる論文集の中で、ライトとカツツは次のように述べる。

「環境倫理学は30年の議論の末、深刻な問題に直面している。その学問は人間と非人間的な自然環境との間の道徳的な関係性の分析において重要な進展を果たしてきた。……(しかし)他方で環境倫理学という分野が環境政策の枠組みに対して、一体どのような実用的 (pragmatic) な影響を与えてきたというのだろうか。環境哲学者による構内の議論は興味深く、刺激的で複雑なものだったが、環境的なもろもろの科学や実践、政策決定者たちの動向に対しては、ほとんど何も現実的なインパクトも与えなかったように見えるのである。……ほとんどすべての人々がいまだに行っている、個体主義か全体論か、人間中心主義か非人間中心主義か、道具的価値か内面的価値か、(道徳的)多元主義か一元論か、といった論争のどちら側が正しいのか、という問いは、不要な抽象論であるようにみえる。一致した見解によると、もっと別のプロジェクトへ移行する時が来た、のである<sup>13</sup>」。

この“宣言”には、「転回」の契機となった論点が端的に含まれているだろう。まず、これまでの議論が不毛なものであったと明言したのは環境倫理学者本人であり、さらに“四つの対抗軸”を見ることで、環境倫理学の議論がこれまで何を争点としてきたのかがよくわかる。そして彼らが目指すのは、これらの議論をいったん“ご破算”にし、抽象的な理論を超えた、現実の政策論や環境改善に寄与しうる新しい道なのである。

### (2) 「プラグマティズム的アプローチ」の問題意識

それでは、環境プラグマティズムが掲げた“戦略”とはどのようなものだったのか。ここで有益なのが、わが国に「環境プラグマティズム」を初めてまとまった形で紹介し、その意味できわめて重要な役割を果たした白水の整理である<sup>14</sup>。白水はこの戦略のポイントを五つの論点として整理した。それは第一に、「道徳的多元主義」であり、一元的な価値を否定し、現実の多様な価値を認めその解釈と言語化を目指したり、異なる立場の人々の間での規範的基盤を希求すること、第二に、「現実主義・文脈主義」であり、抽象論ではなく、現実の個別問題から具体的な価値のあり方を重視する

こと、第三に、「反基礎づけ主義」であり、先に言及したように、価値の普遍的妥当性を理論的に基礎づけることを否定すること、第四に、「自然／人間二元論の否定」であり、原生自然に固執することなく“里山”のような文化的自然、ないし自然／人間の連続体を重視すること、そして第五に、「民主主義の重視」であり、信念や立場の異なる人々の対立に合意形成の道筋を提起すること、である。

このように見ていくと、「環境プラグマティズム」は現代環境思想のパラダイムと決別し、抽象的な課題から具体的な課題へ、理論の構築から実践的な局面での前進へと、大きく軸足を移したことが理解できる。しかし私ならばここに、もうひとつの特徴として、「現場主義」を付け加えるだろう。というのも、このようなアプローチを成功させるためには、研究者自らが現場に参画し、綿密なフィールドワークに基づく知見を積み重ねる必要があるからである。つまり、環境プラグマティストは、基本的には“ラボから現場へ”という標語を掲げざるを得ない。

そして実際に、わが国では「プラグマティズムの転回」を経て、多数の研究者が現場主義的な研究を進めている。例えば丸山は、水俣病という“具体的な事件”をめぐる訴訟の状況にまで深く切り込み、様々な考察を加えているほか、近年は里山という“フィールド”に基づく「里山学」を提唱している<sup>15</sup>。また「空間の履歴」というユニークな議論を展開していた桑子も近年、ステークホルダー間の合意形成をテーマにかなり踏み込んだ実践的な参画を行っている<sup>16</sup>。

さらに注目すべき若手研究者である吉永は、この新しい方向性について評価しつつ、環境倫理学の目標を、「自覚化」および「具体化」として提起している<sup>17</sup>。吉永のいう環境倫理の「自覚化」とは、環境をめぐる主題や命題を、これまでのように人々の生活実践から切り離された「タテマエ」として提起するのではなく、「各自人の経験や実感に根差したものとして受け取られるように」日々の生活の中に、いわば埋め戻していくことであり、「具体化」というのは、「自覚化」されうる主題や命題を、人々が実践として「実現可能」とするために、政策的に制度化していくことである。興味深いのは、吉永がこの「自覚化」と「具体化」の例として都市景観に関わる「美の条例」を挙げている点であり、そこでは景観の「美の基準」を住民のコンセンサスによって構成し、実際の“まちづくり”をその「美の原則」に基づいて実施しようという試みがなされている。“景観の美”というひとつの価値は、人々の経験と生活実践から構築されることで「自覚化」され、

それが政策によって「具体化」というのである。ここでは確かに、これまでになかったような“倫理のあり方”が含まれているのが理解できよう。

### (3) 「プラグマティズム的アプローチ」への疑問

このように見ていくと、「プラグマティズム的転回」によって生じたアプローチは、単に文字通り“実用性”を志向しているわけではないし、今後ユニークな成果をもたらす可能性が十分にあることが理解できる。

しかし、ここで立ち止まって考えなければならない。まず、ここで生じた「転回」は、個別学術領域として自立した学問の“新しいパラダイム”として論じられているのか、あくまで学際的連携のひとつの実践として論じられているのか。そして一連の「転回」は、環境倫理学 (environmental ethics) の問題なのか、それとも環境思想 (environmental thoughts) の問題なのか、ということである。

そもそも個別学術領域として自立した学問の存在意義を問うとき、それは常に“その学問固有の属性”に基づいて体系的に示されなければならないはずである。逆にその試みが、周辺領域と大差のない方法論を採用していたり、あるいは似たような成果や、成果そのものが単なる寄せ集めに終わってしまうならば、その学問は個別学術領域としての存在意義を欠いていることになる。ところがこの新しい試みの強みであるはずの多くの特徴は、基本的にはすでに“周辺”に十分フォローされているように見えるのである。例えば環境問題の現場については、現場主義を徹底してきた環境社会学がすでに存在しているし、政策論では環境経済学の方がいっそう実現可能な提案ができるかもしれない。そして、合意形成を実践するのであれば、学者ではなく、現場の活動家の方が遙かに優れた手腕を発揮できる可能性がある。そう考えると、“プラグマティスト”のアプローチは、哲学者が参画する固有の“学際実践形態”としては理解できるが、それ自身が自立した学問的営為であるとは必ずしもいえないのではないかと<sup>18</sup>。つまり、現代環境思想の行き詰まりを乗り越えようとした環境プラグマティズムは、現実の問題解決という原点に回帰したことによって、皮肉なことに、学問としてはかえってその存在意義が見えない、“学問的混乱”を招いてしまった、ともいえるのである。

それではなぜ、この試みは“混乱”を招いてしまったのだろうか。それは先の行き詰まりに対して、「転回」を進めた研究者たちが、立ち向かうべき真の論点を誤解していたからであるように思える。彼らは失敗の原因を主に“内在的価値論の限界”にみていた。そしてそれを直ちに“抽象的な理論や言説”そのものの限界

と見なしたのであった。しかし真の問題点は、おそらく現代環境思想が環境倫理学を中心に構成され、倫理的観点、あるいは“世界像の問題”にとらわれすぎていたことにあったのである。われわれがああ行き詰まりに際して行うべきだったのは、現場主義に直進することではなく、より高次の学術的カテゴリーを設定し、そこから包括的に学問のあり方を見直すことだった。すなわち環境倫理学をも包含する“環境思想”の定式化である。そして“環境思想”の固有の属性や、固有の役割について明らかにした上で、環境倫理学の試みを位置づけ直す必要があったのである。

#### (4) 環境倫理学として出発した環境思想

ただしこの定式化を試みる前に、ひとつ確認すべき重大な問題がある。それは、なぜ環境思想がこれほどまでに“倫理的であり続けた”のか、という問題である。興味深いことに、環境思想はこれまで常に、曖昧な形で環境倫理学と同一視されてきた。そして実際多くの研究者は、現代環境思想の緒論点を“応用倫理学”の一課題、すなわち“倫理学の個別課題”として理解してきたのである。さらにわれわれは、倫理学に収まらない観点を強調するとき、他にも環境哲学や、エコフィロソフィーといった用語を用いてきたが、その際に環境倫理学との関連において、その概念の学問的定式化を試みることはほとんどなかった。

われわれが“高次のカテゴリー”としての環境思想を想定できず、環境倫理学の範疇にとらわれ続けたのは、端的には、現代環境思想そのものが、もともとそうした性質を持っていたからである。というより、そもそも環境思想は、“初めから環境倫理学だった”のであり、環境倫理学でなければならぬ必然性があった。

これは環境という概念がまだ今日的な意味を持っていなかった 19 世紀に、その前身となった思想が、自然保護思想だったことに由来する。自然保護思想は、特定の自然物を保全 (conservation) すべきかどうか、より端的には、彼らがウィルダネスと呼ぶものを保存 (preservation) すべきかどうか、という問題からスタートしたのであり、これは開拓民国家アメリカという歴史的に特異な事情の元で生まれた発想であった。そしてこの自然保護主義の骨格を、現代環境思想はそっくりそのまま背負ってきたのである。環境危機を乗り越えるという課題と自然保護の課題はそもそも必ずしも重ならない。それでも環境思想は、環境倫理学として誕生すべく、いわば宿命づけられていたのである。

そしてわれわれはここでも先と同じ結論に到達する。すなわち、われわれは“保護か保存か” = “人間中心主義か非人間中心主義”か、という対抗軸を批判する

だけで満足しているが、真に重要なのは、そこに根深く染みついてきた“倫理的に解決しよう”とする姿勢から、いったん距離を取る、ということなのである。

### 3 個別学術領域としての“環境思想”

#### (1) “学際的環境学”からの演繹法

さて、ここからは以上の議論を踏まえ、“個別学術領域としての環境思想”という観点から、一つの定式化を行うことを試みたい。

まず初めに、われわれは環境プラグマティストと同様に、われわれの学問の究極的な存在意義、すなわち“環境危機を解決することに寄与する”、という命題の設定から始めよう。しかしここで重要なのは、哲学者が直接的に問題に関わり解決を志向するのではなく、学問として、さらに学問の連携としてそれを成し遂げていくことを考えるのである。

ここで有意義なのは、環境危機の克服を目的とし、環境に関連するあらゆる学問の有機体として「環境学 (environmental studies)」を設定することである。つまり環境思想を、環境科学 (environmental science)、環境社会学 (environmental sociology)、環境経済学 (environmental economics)、といった学問に並び“学際的環境学”を構成するひとつのユニットとして位置づけるのである。さらにこのとき、“学際性”という概念を、従来の“集合モデル”ではなく、“相互作用モデル”として理解することが重要である。学際性の“集合モデル”とは、既存の学問体系に基づいて、そこからそれぞれ環境へアプローチする研究を寄せ集めるような、昨今の学際を意味する<sup>19</sup>。これに対して“相互作用モデル”というのは、それぞれのアプローチの強みを生かし、弱みを補完するような形で、お互いの学問が連携しあうような学際である。

そうすると、最も重大な論点は、周辺環境関連領域との役割分担として環境思想が何を担っていくべきなのかということになり、ここから、先の“学問固有の属性”を明らかにすることができるのである。

#### (2) “思想的アプローチ”の弱みと強み

それでは、周辺領域とは区別され、またそれらとは異なる重要な役割を担うような、環境思想の“固有の属性”とはどのようなものになるのか。ここではそれを便宜上、「思想的アプローチ」と総称しておこう。

まずここで注目したいのは、環境学を構成する多くの学問が、研究の合理性として、実験に基づく「自然科学的合理性」、フィールド調査に基づく「実証的合理性」、データの解析に基づく「統計学的合理性」にそれぞれ基づくアプローチを組み合わせる研究成果を蓄積

している点である。

これに対して「思想的アプローチ」は、基本的にはこれらを用いない。しかし、そこに強みがあると考えるのである。その最大の強みとは、“抽象性”、“総合性”、“歴史俯瞰性”を生かした体系的な理論を構築できることにある。われわれはまず、“抽象化”によって新しい概念を提示することができる。そして“総合化”によって複数の学科にまたがる研究成果を、いくつかの概念によって構成された理論的枠組みのもとに位置づけることができる。さらに“歴史俯瞰性”によって、その理論的枠組みを、われわれの過去や現在を読み解くツールとして用いることができる。「思想的アプローチ」の弱点は当然、抽象化によるリアリティの低下である。しかしながら、それは抽象化を行う以上避けられない。確かにわれわれは現場の経験や知識を重視する必要があるだろうが、この弱点を補完するのは、まさに他の周辺領域の役割なのである。したがって環境思想の基本的な研究目標と研究課題は、まずこの強みを最大限に生かしながら、周辺領域が提起できない抽象的で、総合的で、さらに歴史俯瞰的な要素も含むような概念と理論を様々な形で構築し、それを学際的相互作用の中で提示していくことだといえるのである。

### (3) 環境思想の研究領域

このような形で、環境思想の基本的な役割と方向性を位置づけた上で、次に考えたいのは、環境思想という学問が実際に行っていく研究領域の整理である。これまでの成果を総括するなら、環境思想の研究領域は、おそらく五種類のカテゴリーとして整理ができるように思える。

A) 「環境思想史」、すなわち“環境について語られてきた言説”を一貫した視点から整理し、また新しい解釈を行う研究領域である。

B) 「道徳論・価値論・権利論」、すなわち環境危機を中心に据えた際に、それがどのような形で新しく展開できるのかを論じる。これは“環境倫理学”と呼んで良いだろう。その意味では、ここでは「権利はエコロジー」の成果をどう批判的に乗り越えていけるのが課題となる。

C) 「存在論・認識論」、すなわち<エコロジズム>や環境危機を踏まえて、来るべき世代の持ちうる新しい“世界像”とは何かについて明らかにする。これは“エコフィロソフィー”といって良い。その意味では、ここではネスを含めた「ディープ・エコロジー」の問題提起や東洋思想などの知見をどのように生かしているのが課題となる。

D) 「実践論」、すなわち環境思想の研究者が現場に

参画することで、現場での学際実践に固有の役割を果たすことを想定している。これは、“環境プラグマティズム”が目指そうとしたことである。

E) 「思想構築」、すなわち環境危機を契機として提起できる新しい概念や思想、理論の枠組みそのものを構築することを目指す。特に、現代の歴史的位相を理論的に位置づけ直し、われわれが本質的に向かっていくべき社会のビジョンについて、理論的に提示する。

このように見ていくと、これまでの研究は圧倒的に、A) から C) までの研究領域に偏ってきたことが理解でき、この意味において「転回」が目指したものが、この状況の打開だったことが理解できる。しかし“抽象的な理論”が問題だったのではなく、“抽象的な理論”の強みこそ、われわれは守っていかなければならない。しかも、現場とのリアリティをなるべく保持したまま、それをやり遂げなければならないのである。さらにプラグマティストの試みは、決して無意味ではない。彼らの試みは、このような環境思想の役割の中で“実践論”というべきひとつの重要な研究領域として位置づけられるからである。

とはいえ、ここでわれわれが最も考えなければならない課題は、先のE)の研究領域、すなわち、“環境思想の思想構築”という課題が、これまで十分に行われてこなかったことである。そしておそらく「思想的アプローチ」の真価が問われるのは、われわれがこの課題をどれだけ達成できるかということなのである。

### (4) “環境思想の思想構築”における方法論

したがってここでは最後に、“環境思想の思想構築”の方法論について、ひとつの枠組みを提示し、具体的な研究モデルを考えてみたい。

「思想構築」とは、新しい言説そのものを作り出すことに他ならない。その際、優れた“環境思想”と呼ぶにふさわしい言説は、以下の条件を少なくとも満たすべき必要があるだろう。

まず a) 「分析枠組み」であり、われわれが世界を分析するための概念と、ひとつの理論的枠組みが明確に設定されていること。b) 「社会モデル」であり、われわれが本質的に向かっていくべき社会のビジョンを明らかにしていること、c) 「歴史哲学」であり、「分析枠組み」によって、過去から現在までの歴史的位相を新しい角度で整理した後、「社会モデル」の必然性と、そこへの移行のプロセスを導き出していること。しかもこれらが、環境危機の本質を中核的な契機としながら、ひとつの理論として体系化されていなければならない。

「思想構築」を行うにあたって、以上の条件を満たす言説を作り出すこと、これが想定できるひとつの方

法論である。それでは、この方法論に用いた研究モデルの具体例を簡単に示しておく。

a) 分析枠組みとして：まず、論点を明確にするために、「持続可能性 (sustainability)」というひとつの概念を中心に起き、その概念構造を深化させる。例えば持続可能な状態では、社会と生態系の関係性や人間存在のあり方はいかなる状態にあるのか。これら进行分析するために、「環境の持続可能性／持続不可能性」、「社会システムの持続可能性／持続不可能性」、「人間存在の持続可能性／持続不可能性」という三つの概念を設定し、それらの有機的な関連性について明らかにする。

b) 社会モデルとして：次に、先の概念を扱う際、現在を、“環境”、“社会システム”、“人間存在”のいずれもが“持続不可能な状態”にあると定義し、これらの“三つの持続可能性”が同時に達成できた姿こそわれわれの向かうべき社会的ビジョンであると定義する。

c) 歴史哲学として：先の“三つの持続不可能性”の本質的な原因、および持続可能性への契機について、ひとつの歴史モデル(物語)を用いて明らかにする。その際、①われわれの世界像・世界観の変遷、②社会様式の変遷、③人間の関係性・存在・生活の様式の変遷という三つの様式の変遷過程を描きながら、特にその三つの変遷の相互連関性を明らかにする。

このように見ていくと、今後われわれが「思想構築」を行うにあたっては、先人たちの仕事を批判的に引き継いでいくことができることが分かる。例えば「ディープ・エコロジー」がこだわってきた、近代的世界像と環境危機の本質的な関係性に関わる議論、あるいは「社会的エコロジズム」の社会構造論的な眼差しがそうである。さらに、“環境危機と人間の危機——特に現代社会における人間的・社会的病理——の連関性”を明らかにしようとしてきた尾関を含む日本の研究者の成果は、この取り組みの大きな基礎となるだろう<sup>20</sup>。

以上の研究モデルは、あくまで筆者が取り組んでいる課題であり<sup>21</sup>、「思想構築」という課題に対しては、それぞれがそれぞれのやり方を開発していく必要があるだろう。重要なのは、あくまでわれわれが先の三つの条件を満たせるような言説それ自身を、今以上に作っていかねばならないということである。

おそらく今、環境思想にもっとも求められているのは、環境危機の本質をわれわれの数万年の歴史過程の中から明らかにしつつ、また、環境危機を乗り越えた先にある、われわれが本質的に向かうべき社会の様式、あるいは人間存在の在り方とは何かを明らかにすることである。そしてこれを本格的に行えるのは、学際的

環境学の中においても、「思想的アプローチ」を得意とする環境思想において他にないのである。

<sup>1</sup> A, Naess(1989). *Ecology, Community and Lifestyle*. Cambridge University Press. (A・ネス『ディープ・エコロジーとは何か』齊藤直輔／開龍美訳 文化書房博文社 1997年)。A, Dobson(1990). *Green Political Thought*. Routledge (A・ドブソン『緑の政治思想—エコロジズムと変革の理論』松野弘(監訳)、栗栖聡／池田寛二／丸山正次(訳) ミネルヴァ書房 2001年)。

<sup>2</sup> 近年海上による環境思想の整理が発表されたが、彼の整理においても、この三つのドメインの区別が試みられている。海上知明『環境思想—歴史と体系』NTT出版 2005年。

<sup>3</sup> 以下の概略は、Naess 前掲を参照。

<sup>4</sup> Naess 前掲 p.55 (同訳 p.90)

<sup>5</sup> Naess 前掲 pp.60-61 (同訳 p.99)

<sup>6</sup> 自己実現 (Self-realization) は、個人的な目標の達成 (self-realization) から区別される。

<sup>7</sup> Naess 前掲 p.174 (同訳 p.277)

<sup>8</sup> Naess 前掲 p.28, p.67 (同訳 p.49, p.109)

<sup>9</sup> ただし、彼が言う'ethic'というものは、あくまで「もし開発者が全体を見ることができれば、彼の倫理は変わるだろう」という性質のものだった。p.66 (同訳 p.109)。

<sup>10</sup> A, Leopold(1989). *A Sand County Almanac*. Oxford University Press. (A・レオポルド『野生のうたが聞こえる』新島義昭訳 講談社学術文庫 1997年)。

<sup>11</sup> J. B. Callicott(1983). *Animal Liberation: A Triangular Affair in C, Pierce, D, Vandever*(1995). *People, Penguin, and Plastic Trees*. Wadsworth. (J・キャリコット「動物解放論争」小原秀雄(監)『環境思想の多様な展開』東海大学出版会 1995年)。ネス自身の正統な後継者はむしろ、トランス・パーソナル・エコロジーを提起した人々であった。

<sup>12</sup> 以上の経緯を含め、以下を参照。Light, Katz(1996). *Environmental Pragmatism*. Loutledge.

<sup>13</sup> Light, Katz 前掲 p.1-2.

<sup>14</sup> 白水士郎「環境プラグマティズムと新たな環境倫理学の使命」越智貢／川本隆史／高橋久一郎／金井淑子／中岡成文／丸山徳次／水谷雅彦編『応用倫理学講義(2環境)』岩波書店 2004年。

<sup>15</sup> 丸山徳次「水俣病の哲学に向けて」越智他編前掲。丸山徳次／宮浦富保編『里山学のすすめ』昭和堂 2007年。

<sup>16</sup> 桑子敏雄「社会的合意形成と風土の問題」『公共研究(第3巻第2号)』千葉大学公共研究センター 2006年。

<sup>17</sup> 吉永明弘「環境倫理学の今後の展開に関する一提案」『環境思想・教育研究(第1号)』環境思想・教育研究会 2007年。

<sup>18</sup> 吉永は、環境倫理学を「哲学を離れ、公共政策の分野の中に打ち立てる」というライトの言葉を引用し、もはや倫理学などの学問的枠組みにとられない「環境保全の公共哲学」を提唱している。吉永明弘『環境倫理学』から『環境保全の公共哲学へ』『公共研究(第5巻第2号)』千葉大学公共研究センター 2008年。

<sup>19</sup> 例えば社会学から“環境”へアプローチするのを環境社会学と呼び、経済学から“環境”へアプローチするのを環境経済学と呼び、それらを寄せ集めるような発想がこれである。

<sup>20</sup> 実はこの「思想構築」という研究領域の足場を築いたのは、尾関周二を初めとして、鬼頭秀一、亀山純生など、東京農工大学を拠点として活躍した研究者たちであった。特に“環境危機と人間の危機が不可分である”というテーゼを引き出した尾関の功績は、日本の環境思想研究において重要な意味を持つ。

<sup>21</sup> 数年内に、この研究モデルに基づく研究成果を『近代批判的環境思想』として出版したいと考えている。